シリーズ ひと

「MALO E LELEI（こんにちは）トンガはずっと住みたくなる心安らぐ国です」

永井（ながい）　國彦（くにひこ）さん

新白岡在住。コンピュータ会社を休職してＪＩＣＡ（ジャイカ）のシニアボランティアとして平成17年10月から２年間トンガ王国の教育省でコンピュータの保守管理に携わった。

※ＪＩＣＡ＝独立行政法人国際協力機構　政府の発展途上国に対する援助の一環として人材を派遣している

トンガの民俗衣装（お祭りでの一コマ）

永井さんは若いころから異文化体験に興味があり、年に2回ぐらい海外旅行をしていた。そのようなことから、自分のスキルを生かして海外でボランティアをしたいと思い立ち、ＪＩＣＡのシニアボランティアに応募した。

トンガを選んだ理由を尋ねると、特にトンガを希望したというわけではないが、最近はＩＴ関連ボランティアの要請が増えており、永井さんの職種ではパラグアイ、トンガ、バヌアツの中での選択ということだった。その中で、仕事内容と自分のスキルが一番合っているトンガを選んだ。

トンガ王国は、サモアの南、フィジーの東に位置し、１７２の島々からなる太平洋の島国。人口は10万人弱、白岡町と蓮田市を合わせた人口よりも少ない国だ。言語はトンガ語のほか、学校の授業では英語を使っており、英語が通じる。

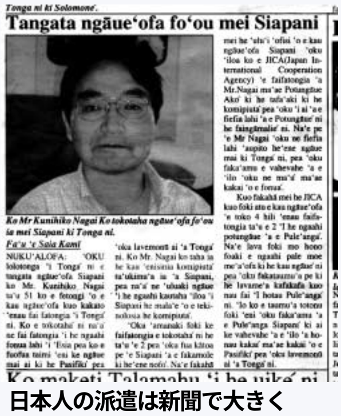
現地での仕事は、教育省に導入されているコンピュータの保守管理方法の指導。各学校にＩＴコーディネーターを設けるなど、障害発生時のシステムづくりも手がけた。しかし、問題は山積だった。

「トンガの人は、コンピュータのスキルが身につくと、給料の高いフィジー、ニュージーランド、オーストラリアといった外国に行ってしまうんです。それに、電圧も一定でなく電化製品にとっての環境は良くないですね。コンピュータは、次々と故障していって、開けてみるとヤモリの死骸が出てくることもありました。」と話してくれた。

しかし、人と人とのつながりを大事にしていて優しいという。「離島に行った際、ある人の電化製品を修理してあげたところ、そのことが広まり、おおぜいの人たちが家から壊れた電化製品を持ってきました。そして、みんながお礼にということで食事に招待してくれるんです。ふつう、海外ボランティアに行くとやせて帰ってくる人が多いのですが、わたしは逆に太ってしまいましたよ。」と笑って話してくれた。

そんな心優しいお国柄ではあるが、王制に対する不満から昨年11月に民主化暴動が起き、市街地の多くが焼かれてしまった。

さらに、永井さん自身も今年８月に就寝中に窃盗に遭ってしまい、パソコンをはじめとして電化製品ほぼすべてが盗まれてしまった。「頭を殴られ十数針縫った日本人もいるんです。もし、あのとき目が覚めたらと思うとゾッとします。」と当時を振り返る。



Tonga ni ki Solomone.

Tangata ngāue'ofa fo'ou mei Siapani

Ko Mr Kunihiko Nagai Ko tokotaha ngāue'ofa fo'ou ia mei Siapani ki Tonga ni.

日本人の派遣は新聞で大きく扱われました

そんな体験もあったが、永井さんはトンガについて好印象を持っている。「トンガの人々は、日本に対し「日本は先進工業国であり、日本人は勤勉で時間を守る」という印象を持っています。一方、トンガでは決められた時間に会議が始まることは稀でした。庭先にはバナナ、パパイヤ、マンゴーなど、多くの南国の果実が実り、ゆったりした時間が流れる、青い空と青い海の南の島です。ストレスやプレッシャーを抱えて生活している日本人よりも魅力的な生き方をしているのではないかと思いますよ。一生住んでもいいですね。」と語ってくれた。

そんな永井さんに、今後について尋ねると、「また海外ボランティアに行ってみたいです。今度は中南米のスペイン語圏の国で活動してみたいです。いろいろな語学を習得して世界中の人と話せるようになれたらいいですね。」と、更なる大きな夢を語ってくれた。